



SAGE 質的研究キット  
ウヴェ・フリック監修

7

# 会話分析・ ディスコース分析・ ドキュメント分析

ティム・ラプリー

大橋靖史・中坪太久郎・綾城初穂 [訳]

どうデータを収集し、書き起こすか。  
どのように分析していくか。

ドキュメントや音声・ビデオ材料のデータのとり方と分析の実際、ノウハウを、具体例を用いて詳細に解説。学部学生や、質的研究に馴染みのない院生・研究者が分析に挑戦できるよう工夫された、実践的な入門書。

新曜社



**SAGE 質的研究キット**

ウヴェ・フリック監修

7

# 会話分析・ ディスコース分析・ ドキュメント分析

ティム・ラプリー

大橋靖史・中坪太一郎・綾城初穂 [訳]

新曜社

SAGE 質的研究キット 全8巻

1. 質的研究のデザイン	フリック, U./鈴木聡志 (訳)
2. 質的研究のための「インター・ビュー」	クヴァール, S./能智正博・徳田治子 (訳)
3. 質的研究のためのエスノグラフィーと観察	アンゲロシーノ, M./柴山真琴 (訳)
4. 質的研究のためのフォーカスグループ	バーバー, R./大橋靖史他 (訳)
5. 質的研究におけるビジュアルデータの使用	バンクス, M./石黒広昭 (監訳)
6. 質的データの分析	ギブズ, G. R./砂上史子・一柳智紀・一柳梢 (訳)
7. 会話分析・ディスコース分析・ドキュメント分析	ラブリー, T./大橋靖史・中坪太久郎・綾城初穂 (訳)
8. 質的研究の「質」管理	フリック, U./上淵寿 (訳)

DOING CONVERSATION, DISCOURSE AND DOCUMENT ANALYSIS

Tim Rapley

SAGE Qualitative Research Kit 7

Copyright © Tim Rapley 2017. All rights reserved.

This translation is published under cooperation contract between SAGE and Shinyosha.



## 編者から

ウヴェ・フリック

- 「SAGE 質的研究キット」の紹介
- 質的研究とは何か
- 質的研究をどのように行うか
- 「SAGE 質的研究キット」が扱う範囲

### 「SAGE 質的研究キット」の紹介

近年質的研究は、そのアプローチがさまざまな学問分野にわたってしだいに確立され、尊重されるようになってきたため、これまでになかった成長と多様化の時期を謳歌している。そのためますます多くの学生、教師、実践家が、一般的にも個々の特定の目的のためにも、質的研究をどのように行ったらよいのかという問題と疑問に直面している。こうした問題に答えること、そしてハウターのレベルでそうした実際的な問題に取り組むことが、「SAGE 質的研究キット」（以下「キット」）の主な目的である。

この「キット」に収められた各巻は、全体が合わさって、質的研究を実際に行う際に生じる中心的な諸問題に取り組んでいる。それぞれの巻は、社会的世界を質的な見地から研究するために用いられる主要な手法（たとえば、インタビューやフォーカスグループ）や資料（たとえば、ビジュアルデータやディスコース）に、焦点を当てている。さらに、「キット」の各巻は、多くの多様なタイプの読者のニーズを念頭に置いて書かれている。「キット」とこれに収められたそれぞれの巻は、以下のような広範なユーザーに役立つだろう。

- 質的な手法を使った研究を計画し実行する上で問題に直面している、社会科学、医学研究、マーケットリサーチ、評価研究、組織研究、ビジネス研究、経営研究、認知科学などの質的研究の**実践者**たち。
- こうした分野で質的手法を使用する**大学教員**。授業の基礎としてこのシリーズを用いることが期待される。
- 質的手法が、実際の適用（たとえば論文執筆のため）を含めて大学の学業訓練の（主要な）一部である、社会科学、看護、教育、心理学、その他の分野の**学部生と大学院生**。

「キット」に収められた各巻は、フィールドでの広範な経験をもつだけでなく、その巻のテーマである手法の実践においても豊かな経験をもつすぐれた著者たちによって書かれている。全シリーズを最初から最後まで読むと、倫理や研究のデザイン、研究の質の査定といった、どのような種類の質的研究にとっても重要な諸問題に何度も出会うことだろう。しかし、そうした諸問題はそれぞれの巻において、著者の特定の**方法論的視点**と著者が述べる**アプローチ**から取り組まれる。したがって読者はそれぞれの巻で、研究の質の問題へのさまざまなアプローチや、質的データの分析のしかたへのさまざまな示唆を見出すであろうが、それらが全体として合わさって、この分野の包括的な描写を得ることができるだろう。

## 質的研究とは何か

質的研究のさまざまなアプローチにも研究者の大多数にも共通に受け入れられている、質的研究の定義を見出すことはますます困難になっている。質的研究はもはや、たんに「量的研究ではない」研究ではなく、それ自身の1つのアイデンティティ（あるいは多数のアイデンティティ）を発展させている。

質的研究には多数のアプローチがあるとは言っても、質的研究に共通するいくつかの特徴を確認することができる。質的研究は「そこにある」世界（実験室のような特別に作られた研究状況ではなく）にアプローチし、「内側から」社会現象を理解し、記述し、時には説明することを意図する。しかしそのやり方は実にさまざまである。

- 個人や集団の経験を分析することによって——経験は生活史や日常的・専門的実践と関係づけられることもある。それらは、日常的な知識や説明や物語を分析することによって取り組まれるかもしれない。
- 進行中の相互作用とコミュニケーションを分析することによって——これは、相互作用とコミュニケーションの実際の観察と記録、およびそうした資料の分析に基づく。
- ドキュメント（テキスト、写真・映像、映画や音楽）を分析することによって、あるいはドキュメントに類した経験や相互作用が残した痕跡を分析することによって。

このようなアプローチに共通するのは、人びとは周りにある世界をどのように作り上げるのか、人びとは何をしているのか、人びとに何が起きているのかを、意味のある豊かな洞察を与える言葉でひも解こうと試みることである。相互作用とドキュメントは、協同して（あるいは衝突しながら）社会的プロセスと社会的人工物を構成する方法と見なされる。これらのアプローチはみな意味生成の方法であり、意味はさまざまな質的手法で再構成し分析することができ、そうした質的手法によって研究者は、社会的な（あるいは心理学的な）問題を記述し説明するしかたとしての（多少とも一般化可能な）モデル、類型、理論を発展させることができるのである。

## 質的研究をどのように行うか

質的研究にはさまざまな理論的・認識論的・方法論的アプローチがあること、そして研究される課題も非常に多岐にわたることを考慮するなら、質的研究を行う共通の方法を示すことはできるのだろうか。少なくとも、質的研究の行い方に共通するいくつかの特徴をあげることはできる。

- 質的研究者は、経験と相互作用とドキュメントに、その自然な文脈において、そしてそれらの個々の独自性に余地を与えるようなやり方で、接近することに関心がある。

- 質的研究は、最初から研究する事柄についての明確に定義された概念を用意し、検証仮説を公式化することを控える。むしろ、概念（あるいは、もし使うなら仮説）は、研究の過程で発展し、洗練されてゆく。
- 質的研究は、手法と理論は研究される事柄に適したものであるべきだ、という考えのもとで始められる。既存の手法が具体的な問題やフィールドに合わないなら、必要に応じて修正されるか、新しい手法やアプローチが開発される。
- 研究者は研究するフィールドの一員であり、研究者自身が、研究者というあり方でそこに臨むという点でも、フィールドでの経験とそこでの役割への反省を持ち込むという点でも、研究過程の重要な部分である。
- 質的研究は、研究課題の理解にあたって文脈と事例を重視する。多くの質的研究は一事例研究や一連の事例研究に基づいており、しばしば事例（その歴史と複雑さ）が、研究されている事柄を理解する重要な文脈となる。
- 質的研究の主要な部分は、フィールドノートやトランスクリプトに始まり、記述と解釈、最終的には知見の発表、研究全体の公刊に至るまでの、テキストと執筆に基づいている。したがって、複雑な社会状況（あるいは写真・映像のような他の資料）をテキストに変換するという問題（一般には文字化と執筆の問題）が、質的研究の主要な関心事となる。
- 手法が研究されている事柄に適切であると考えられる場合でも、それが質的研究にとって、そして質的研究の特定のアプローチにとって適切かという視点から、質的研究の質を定義し査定する諸アプローチについて（さらに）考察されなければならない。

## 「SAGE 質的研究キット」が扱う範囲

- 『質的研究のデザイン』（ウヴェ・フリック）は、何らかのかたちで質的研究を使う具体的な研究をどのように計画し、デザインするかという観点から書かれた質的研究の簡潔な入門書である。それは、研究過程でそうした諸問題をどう扱うか、どう解決するかに焦点を当てることで、「キット」の他の巻に対するおおよその枠組みを与えることを意図して

いる。この本では、質的研究の研究デザインを作るという問題に取り組み、研究プロジェクトを機能させる足がかりについて概略を述べ、質的研究における資源といった実際的な諸問題について述べるが、質的研究の質といったより方法論的な問題や倫理についても考察する。この枠組みは、「キット」の他の巻でより詳しく説明される。

- 質的研究におけるデータの収集と産出に、3冊が当てられる。第1巻で簡潔に概説した諸問題を取り上げ、それぞれの手法に対して、さらに詳しく、集中的にアプローチする。まず、『質的研究のための「インター・ビュー」』（スタイナー・クヴァール）は、特定の話題や生活史について人びとにインタビューすることのもつ、理論的、認識論的、倫理的、実践的な諸問題に取り組んでいる。『質的研究のためのエスノグラフィーと観察』（マイケル・アングロシーノ）は、質的データの収集と産出の第二の主要なアプローチに焦点を当てている。ここでも実践的な諸問題（サイトの選択、エスノグラフィーにおけるデータ収集の方法、データ分析における特殊な問題）が、より一般的な諸問題（倫理、表現、1つのアプローチとしてのエスノグラフィーの質と適切性）の文脈で考察される。『質的研究のためのフォーカスグループ』（ロザリン・バーバー）では、データ産出の第三のもっとも主要な質的手法が提示される。ここでも、フォーカスグループでサンプリングやデザインやデータ分析をどう行うかの問題と、データをどうやって生み出すかに焦点が強く当てられている。
- さらに3冊が、特定のタイプの質的研究の分析に当てられる。『質的研究におけるビジュアルデータの使用』（マーカス・バンクス）は、焦点を質的研究の第三のタイプに広げている（インタビューとフォーカスグループに由来する言語データと観察データに加えて）。一般に社会科学研究ではビジュアルデータの使用は主要なトレンドになっているだけでなく、データの使用と分析にあたって研究者を新たな実際的な問題に直面させ、新たな倫理的問題を生み出している。『質的データの分析』（グラハム・R・ギブズ）では、どのような種類の質的データの理解にも共通する、いくつかの実際的なアプローチと問題に取り組む。特にコード化、比較、コンピュータが支援する質的データ分析の使用に、注意が払われ

ている。ここでの焦点は、インタビューやフォーカスグループや個人史と同じく言語データにある。『会話分析・ディスコース分析・ドキュメント分析』（ティム・ラプリー）では、言語データから、ディスコースに関連する異なるタイプのデータへと焦点が拡張され、ドキュメントのような現存資料、日常会話の記録、ディスコースが残す痕跡の発見に焦点が当てられる。アーカイブの生成、ビデオ資料の文字化、それにこのようなタイプのデータのディスコースの分析のしかたといった、実際的な問題が考察される。

- 『質的研究の「質」管理』（ウヴェ・フリック）は、質的研究の質の問題を取り上げる。この問題は、「キット」の他の巻でもそれぞれのテーマの文脈で簡潔に触れられているが、本書でより一般的なかたちで取り上げる。ここでは研究の質を、質的研究の現存の規準を使って見たり、あるいは規準を再定式化したり新しく定義するといった角度から検討する。この巻では、質的方法論における「質」と妥当性を定めるのは何であるべきかについて現在も進行している議論を検討し、質的研究における質を高め、管理するための多くの戦略を検討することになる。質的研究におけるトライアングレーション戦略と、質的研究の質を高めるといふ文脈での量的研究の使用に、特に関心が払われている。

本書の焦点、そしてそれが「キット」に果たす役割について概略を述べる前に、この「キット」が世に出る力添えをいただいたSAGE社の方々に感謝を述べたい。いつのことだったか、このプロジェクトを私に勧めてくれたのはマイケル・カーマイケルであるが、いざ始めるに当たって彼の示唆は非常に役に立った。パトリック・ブリンドルはこのシリーズへの支援を引き継ぎ、継続してくれた。ヴァネッサ・ハーウッドとジェレミイ・トインビーは、われわれの草稿を本に仕上げてくれた。



## 本書と第2版について

ウヴェ・フリック

ディスコースを分析することは、現在、質的研究における主要なアプローチの一つとなっている。会話を分析することは、データとしてのドキュメントの利用と同様に、質的研究の歴史において長い伝統がある。こうしたアプローチにおいて、データ収集はしばしば、自然に生じるやりとりを記録することで、材料のセットを作り出したり、あるいは、たとえば新聞記事を選んだり各種機関のファイルからドキュメントを選ぶことに焦点が当てられている。このプロセスでは、インタビューやフォーカスグループといった、特に研究プロセスのためにデータを作り出す伝統的なデータ収集の方法はマイナーな役割を果たしている。ここで決定的なのは、むしろ研究目的のために現存する材料を利用可能にし、まとめ上げる方法である。したがって、音声やビデオ材料の書き起こしやアーカイブの作成といったステップが研究プロセスにおける中核となり、単なる技術的な、もしくは些細な問題ではない。倫理は、この文脈において、特定のしかただけでなく、異なったしかたで関連することになる。

本書はこうした問題を、ディスコース分析や会話分析の観点から扱う。そうすることで、書き起こしのようなトピックに、異なった、かつ、おそらく「SAGE 質的研究キット」の他の巻よりもより組織だった解釈を与える。しかし本書はまた、「キット」の他の巻によって補われもする。インタビューやフォーカスグループは会話の特定の状況であり、伝達される内容だけでなく、それ自体として分析が可能だからである。したがって、本書とバーバー (Barbour, 2017) によるフォーカスグループの巻、クヴァール (Kvale, 2007/Brinkmann & Kvale, 2017) によるインタビューに関する巻は、互いに補完しあう関係にある。

同じことはビジュアル材料 (Banks, 2007/2017) の利用についても言え、

ディスコースを研究するために利用することができる。ギブズ (Gibbs, 2017) によるデータ分析に対するより一般的なアプローチは、ディスコースや会話の分析に関連する材料のコード化、とりわけコンピュータやコンピュータソフトの利用について、より詳細に概観している。本書は、「SAGE 質的研究キット」の文脈の中で、とりわけ単一のアプローチを取り上げているが、同時に、キットのより一般的な視野の中にしっかり埋め込まれている。分析の質やプランニングについてのより突っ込んだ考察は、質的研究のデザイン (Flick, 2007/2017c) や研究プロセスにおける質の管理 (Flick, 2007/2017d) に関する、より一般的な指摘に付随することがらである。本書の第2版は、全般にわたってアップデートされ、拡充されている。



## 謝 辞

本書は、人々、テキスト、対象物、直観や記憶との日常的で、かつ風変わりな相互作用が組み合わされて生み出されたものなので、私は、誰に、そして何に対してお礼を言うべきか定かでない。このジレンマの一端に対処するため、ミュージシャンのサブ・マルチネスの言葉を次のように言い換えたい。今私を知っているすべての人々、過去に知っていたがもはや会うことのないすべての人々、これから知り合うであろうすべての人々、そして、私が出会うことがないすべての人々に、感謝します。

もっと实际的に述べれば、本シリーズの編者であるウヴェ・フリックにお礼を述べなければならない。彼のアドバイスと信頼、忍耐にありがとうと言いたい。また、何年にもわたって質的研究について長々としゃべるのを聞かなければならなかった研究仲間、友人、そして学部学生、大学院生の皆さんに感謝しなければならない。概して、こうして話したり教えたりする時々が、私に多くのことを教えてくれた。

最後に、愛情とサポート、尊敬（そして明らかに多くの忍耐）を尽きることなく示してくれた、また、情熱と知性、知恵をもって考え、行動することが意味することへと私を導いてくれた両親、ダイアンとトニー・ラブリーに感謝を述べなければならない。本書を彼らに捧げる（また、子どものとき、作文を書くことが嫌いだった私が、仕事のために本書を書き上げたことに、彼らは驚くに違いない）。



## 目次

編者から (ウヴェ・フリック) —————	<i>i</i>
「SAGE 質的研究キット」の紹介	i
質的研究とは何か	ii
質的研究をどのように行うか	iii
「SAGE 質的研究キット」が扱う範囲	iv
本書と第2版について (ウヴェ・フリック) —————	<i>vii</i>
謝辞 —————	<i>ix</i>
1章 ディスコースを研究する —————	<i>1</i>
導入的ないくつかの考え	2
起源についてのいくつかの考え	5
次章以降についてのいくつかの考え	8
2章 アーカイブを生み出す —————	<i>11</i>
「データ」のソース	12
ドキュメントにもとづくソース	14
音声とビジュアルにもとづくソース	24
まとめ	31
3章 倫理と「データ」の記録 —————	<i>33</i>
研究「データ」を作成し記録する際の倫理的問題	35
まとめ	46
4章 記録の実際 —————	<i>49</i>
記録機器	50
何を記録するかをどのように知るか?	51
インタビューとフォーカスグループの実際	52
音声、もしくはビデオにもとづくエスノグラフィーの実際	57

まとめ	66
<b>5章 音声とビデオ材料の書き起こし</b> —————	<b>69</b>
記録の紹介	71
場面を描写する	72
基本的なトランスクリプト	73
細部の問題	79
ジェファーソン式トランスクリプト	83
作業用トランスクリプト vs. 報告用トランスクリプト	88
ビデオにもとづくデータを使う	90
イメージを書き起こす	91
まとめ	96
<b>6章 会話を探究する</b> —————	<b>101</b>
発話におけるありふれた瞬間の探究	104
社会生活の習慣的組織化	108
だから何なのか？	120
まとめ	121
<b>7章 ドキュメントについての会話、ドキュメントによる会話の探究</b> —————	<b>123</b>
ドキュメントの使用	124
ケーススタディ — 精神科の記録はどのように作られたか	128
ケーススタディ — レポート結果の読み取りと レポートの知見の報告	131
ケーススタディ — 法廷のビデオ記録の理解	134
まとめ	137
<b>8章 会話とディスコースを探究する — いくつかの議論とジレンマ</b> —————	<b>139</b>
分析者の隠れた役割	144
相互行為の1コマのみに焦点をあてる	147
フォーカスグループやインタビューから得たデータの、 ローカルな文脈について研究する	149
権力（や他の鍵概念）について研究する	151
まとめ	155

<b>9章 ドキュメントを探究する</b>	157
何がそこにあるのか（何がそこにはないのか）を考える	158
事例を検討する	160
論点を広げる	163
誰にとっての問題か、誰にとっての解決か？	166
いままでの歴史を考える	170
まとめ	176
<b>10章 ディスコースを研究する — おわりに</b>	179
アーカイブをコード化し、分析し、考える	180
品質とリフレクションの問題	183
会話、ディスコース、ドキュメントを分析する諸段階と キーポイント	186
（最後の）まとめ	188
訳者あとがき	189
用語解説	193
文献	197
人名索引	203
事項索引	204

装幀 = 新曜社デザイン室

## ボックスと図リスト

### ボックス

- |        |                             |    |
|--------|-----------------------------|----|
| 3.1 例1 | 建設業界の管理職者への、女性の役割に関するインタビュー | 36 |
| 3.2 例2 | 若者の医療経験研究                   | 36 |
| 4.1 例1 | 病棟での医療上の意思決定                | 58 |
| 4.2 例2 | チーム・ミーティングにおける書類の確認         | 59 |
| 5.1    | トランスクリプションのためのポーランドの指示      | 80 |
| 5.2    | 簡易版ジェファーソン式トランスクリプションの決まり   | 83 |

### 図

- |     |                       |    |
|-----|-----------------------|----|
| 5.1 | 抜粋 5.1 の一部を書き起こし直したもの | 97 |
|-----|-----------------------|----|



## 1章 ディスコースを研究する

導入的ないくつかの考え

起源についてのいくつかの考え

次章以降についてのいくつかの考え



### この章の目標

- ディスコース研究の中心となる仮定や考えのいくつかについて知る。
- 本書の全般的な輪郭と目的について理解する。

会話やディスコース、ドキュメントに関する研究を企てる人々は、書かれた、もしくは話された言語に興味をそそられている。ディスコースに関心がある人々がまだ研究していないことが何か、私には実際わからないが、インターネットのように、人間の（そして非人間の）行為のほとんどあらゆる領域について研究がなされてきた。人種的偏見やセクシュアリティ、狂気に焦点をあてた古典的な研究があるが、今日では、友人同士の語りにおける「ウンフン (uh huh)」の役割から遺伝子組み替え食品に関する政府の法律にまでわたっている。分析される潜在的な材料のソースの範囲も同様に巨大である。公的なドキュメント、法令、政治的論争、あらゆるタイプのメディア産出物、何気ない会話、職場での話し合い、インタビュー、フォーカスグループ、エスノグラフィ、インターネットのブログやチャット・ルーム等々。本書は、使用されている言葉についていかに研究することができるかを探究することを目的とする。そのとき直面するであろう非常に実際的な問題と、利用することができる非常に実際的な解決方法について、詳細に概説することを目的としている。

## 導入的ないくつかの考え

「ディスコース分析<sup>[訳注]</sup>\*」という用語は、しばしば、本書の中で見ることになる研究のやり方を描写するために使われている。不幸なことに、この用語は多くの意味を持っている。ある人々にとっては、「人種の偏見」や「ナショナリズム」といったいくつかの特定のディスコースが、さまざまなインタビューの書き起こしや新聞の社説にわたっていかに使われているかに焦点をあてることを意味している。他の人々にとっては、「その証拠が示唆するのは」とか「明らかに」といった特定の言葉が、会話の録音記録や、特定のケースについて論じる1本の科学論文の中でいかに使われているかに焦点をあてることを意味している。アプローチに関わりなく、ディスコースを分析する人々にとって一番の関心事は、言葉がある文脈においてどのように使われているかにある。そして、文脈は、会話の特定の瞬間から特定の歴史的な時間までに及び得る。

大まかなレベルにおいて、ディスコースを研究する人々は、言語を遂行的(performative)で機能的(functional)なものとして見ている。すなわち、言語が中立的で透明なコミュニケーション手段として扱われることはない。しかし抽象的に述べるよりも、次のような「古典的な」例を示してみよう。2人の報告者が1人の男が撃たれるのを見た。翌日、ある新聞の見出しには「自由の戦士、政治家を殺害」と書かれており、他の新聞の見出しには「テロリスト、政治家を殺害」と書かれている。可能な問いとして、次のようなものがあるだろう。

- どちらが本当なのか？
- どちらが正しいのか？
- どちらが事実なのか？

そして、これは、単なる哲学的、もしくは抽象的な問いではない。アフガニ

---

[訳注] 右上にアスタリスクが付されている語は、巻末の用語解説に含まれている。適宜参照していただきたい。

スタンからキューバのアメリカ領に移送され、グアンタナモ湾に強制収容された人々の状態に関する論争を通して、私たちは、近年の歴史の中で、このことが探究されるのを見た。そうした議論の一つは、こうした人々が「戦争捕虜」と理解されるべきか否か、したがって彼らは、法的に保護された一連の人権を持っているのか、それとも「違法な戦闘員」と理解されるべきか否かに集中した。同様に、パキスタンの第10代大統領、ペルベズ・ムシャラフは、まさに誰が「自由の戦士」で誰が「テロリスト」かを定義することの現代の困難さについてコメントした、多くの政治的リーダーの一人である。それゆえ、こうした例からもわかるように、言語は構築的であり、社会生活を構成するのである。話したり書くことで、私たちは世界を作っている。

したがってディスコースを分析する人々にとっての関心は、いかに言語が使用されているかにある。焦点は、どのような世界の特定のバージョン、あるいは、アイデンティティ、意味が、何かを他のやり方ではなくまさにそのやり方で描写することによって、作り出されるかにある。つまり、他のやり方ではなくこのやり方で何かを描写することによって、何が利用可能になり、何が排除されるかに焦点があてられる。よりありふれてはいるが、もう一つの古典的な例を示そう。次に挙げるリストの要素は、私について、すべて「本当であり」、「正しく」、そして「事実」であることにご留意いただきたい。

- 私は年取っている。
- 私は若い。
- 私はドクターである。
- 私はドクターではない。
- 私は1973年8月10日に生まれた。
- 私は1973年8月9日に生まれた。

これらの私に関する対照的な陳述の中で、もっとも単純な、年をとった／若い二分法を取り上げてみよう。なるほど、ある瞬間、ある人々と一緒にいると、私は「若い」と見なされる。たとえば、私は何人かの社会人学生を教えているが、彼らの一人が遅れて部屋に入ってきて、私のような年の者が先生であり得ることを信じようとしなかった。彼女がそのとき述べたように、「私は